

高層結婚を承諾
方位置はアン
のに止まる
際、優生学だ
り、結婚とさ
の他のもも『
』

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

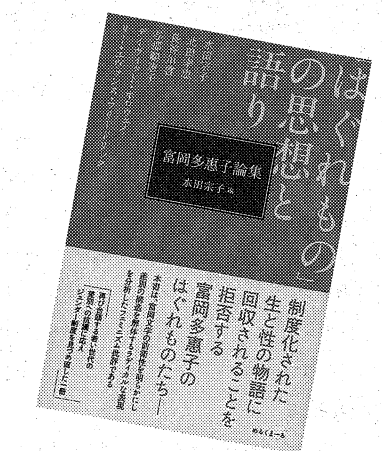
「はぐれもの」は、
『はぐれもの』
の他のもも『
』

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

水田宗子 編
▶富岡多恵子論集
「はぐれもの」の思想と語り
1・22刊 四六判320頁 本体2500円
めるくまーる



フェミニズム＝批評である。だからモメンタムが揺動するといふなら、あなたは批評と呼ばれる圏域から撤退するがいい。どういふことか。フェミニズム＝批評においてのみ、批評性における性差がむき出されるからである。つまり、どういふことか。批評性」というタームそのものが、つねにすでに、ファルスの男性原理＝性差の自明性に制約されており、「批評性」を意味する他像、感覚などすべてに未回収に措く前衛性＝戦闘性＝流動性＝外部性においてのみ、批評性が残存しうるといふ逆説が生き抜かれるのである。このフェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応した一冊である。

かくして水田宗子はじめ、北田幸恵、長谷川啓、与那覇恵子、デイヴィッド・ホロウ

エイ、リー・エヴァンス・フリードリックの6人の論者による富岡多恵子論においてフェミニズム＝批評が実践される。つまり、批評性の前線にフェミニズムが召喚される。書名にある「はぐれもの」というユニヴァースは、水田が「制度化された生と性の物語」に回収されることを拒否する富岡のはぐれものたち——その語りえない闇を抱えた心と生き方の精神の在所を探索する富岡文学の前衛性を明らかにし、差別の構造を解き解するフェミニズム批評であり、今再び台頭する若い世代の差別への抗議にも心え、ジェンダー制度の「外部」を思考する」と「序文」に記した本書のモチーフを複数的にたらぬ

まず、社会制度によって経済・契約行為に接合された「性規範から「はぐれもの」の維持と再生を可能にしていく知的中産階級」のモラルや「ヒューマニズム」などの「構造の解体」に向かう。現実的には、「家族」のトラウマからの逃走」の場面が小説という形態で語られる。性の禁忌や倫理をはずしてみせることによって、(…)近代の構造と(…)原初的な関係」との「深い溝を、はつきりと

「はぐれもの」は、「母」から「はぐれもの」は、「母」から「母」を分節した一切の制度から「はぐれもの」といふ危険な象徴秩序を異化し、危地に漂流すること等しい。フェミニズム＝批評が、つねにすでに、原初的な危地に在るといふのはそういう意味である。(批評家・詩人)

ウラジーミル・ソローキン 著
松下隆志 訳
▶マリーナの三十番目の恋
10・30刊 四六変型判318頁 本体3200円
河出書房新社

かつて存在した数多くの
マリーナの的なものへの鎮魂の書
時代は現代を映す鏡であり、今のロシアと深く繋がっている

忍澤勉



思想家であり経済学者、かつ哲学者、なにより革命家だったカール・マルクスは、二十世紀に大きな影響を与えた十九世紀の人物の一人といっている。その彼が死んだ二八八年の百年後の一九八三年、かつて彼の思想の結果として成立した、ソビエト連邦の首都モスクワがこの小説の舞台なのである。彼の思想を継いだのがレーニンとスターリンだと仮定すれば、この年代の符合は興味深い。

そのスターリンが死んだ一九五三年に生まれた主人公マリーナは、一九八三年で三十三歳になる。あどろきによるとこの小説の執筆は一九八二年から八四年に行われ、西側での出版が一九八七年以降、ロシアでの発行はソビエト崩壊後の一九九五年で、日本での訳出が二〇二〇年。この年代は物語を理解する上での標榜となるだろう。

主人公の生年とスターリンの死の一致は物語の起点、かつ軸である。彼の死を受けつ

この作品がソビエトで出版できなかったのは、繰り返される性描写のためではなく、この新聞記事にあったのではないだろうか。舞台となった一九八三年は長期にわたったブレジネフの死を継いだアンドロポフの時代だったが、僅かに光明を見せながらも彼の時代はその死によってあつたまま終わり、続いたチルネンコ政権も短命だった。この二人の中継ぎを経て、ゴルバチョフに政権が移ることになり、ソビエトに運された変化の兆しが現れる。しかしその軋みのままソビエトは崩壊し、ロシアと体制が変わってからエリツィン、プーチンと続いている。この小説がロシアで発行された九五年は、このエリツィンの時代である。西側諸国で出版された当時は現代文学であったこの作品も、本国ではすでに時代小説になっていたといえなくもな。しかし時代は現代を映す鏡であり、今のロシアと深く繋がっている。一九八三年に「マリーナの」の文盲の風に姿を消した三十歳のマリーナは、今年六十八歳になる。「マリーナ」さまたく別の媒体となっているソビエト・ロシアの変容の時代を、彼女はどのように生きたのだろうか。それを想像する時、この小説はかつて存在した数多くのマリーナの的なものへの鎮魂の書でもあると思える。

(ライター)

「はぐれもの」は、
『はぐれもの』
の他のもも『
』

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応

「はぐれもの」がフェミニズム＝批評の
危地を漂流する
フェミニズム＝批評の原初的な危地と富岡多恵子というユニバーサルな創作者が相互的に呼応